

# 老舍研究会会報 第11号

胡絮青女士 題字

## 介绍北京老舍研究会 开展活动的一些情况

甘海岚

尊敬的团长及日本老舍研究爱好者访华团的各位先生、女士们：

今天，我能参加这个会，见到这么多研究老舍、热爱老舍著作的同行、朋友，感到非常高兴。你们为了深入研究和理解老舍，扩大老舍著作在日本的影响，千里超超、跨越越海来到北京，追寻老舍先生的足迹，这种热忱、这种锲而不舍的挚着精神，十分令人感佩。

老舍是中国的，也是世界的，中国和日本的老舍研究者和广大老舍著作爱好者，都热爱和尊敬老舍先生，珍重他留给人类的宝贵文化遗产，因此，我们的心是相通的。也正是因为这样，才有今天大家的相聚。为了增进了解，交流信息，我受老舍研究会的委托，在这里向各位介绍一下北京老舍研究会开展活动的一些情况。

☆ ☆ ☆

北京老舍研究会成立于1986年，会长是曹禺先生。本会成员，大多数同时又是中国老舍研究会成员。北京老舍研究会的宗旨是，团结市属科研单位、大专院校的专业研究人员和教师，以及

北京的作家和广大老舍著作爱好者，加强彼此间的横向联系，促进学术交流，推进老舍研究工作的开展，弘扬民族文化。

北京老舍研究会成立以来，以本会为中心，北京地区举办了多次老舍研究学术活动。比如：

1986年秋，由《北京文学》、《光明日报》出面组织了在京部分作家、评论家的现实主义和语言风格等问题进行了探讨；

1988年初，北京人民艺术剧院召开了话剧《太平湖》公演座谈会，老舍研究者和演员、作家、戏剧评论家一起，对这部描写老舍的剧作和老舍之死的论题，展开了讨论；

1988年夏，本会和北京市曲艺协会共同举行了“老舍和曲艺”研讨会，会上，熟悉老舍先生的曲艺界老艺人、曲艺创作者和理论工作者座谈了老舍解放前、后两个时期的曲艺创作成就和他在大众通俗文艺方面的巨大贡献；

去年（1990年）8月，我们召开了北京老舍研究会的首届理论年会，参加会的有科研单位和大专院校的老舍研究者、以写北京生活著称的当代北京作家等，共四十余人。会议开了三天，会上总结了本会工作，并围绕老舍的爱国主义思想、民族精神和他作品中浓郁的北京地域特色和独特的艺术风格等问题进行了学术交流。发言者从不同角度探讨了《老舍和忧患意识》、《老舍与京味小说》、《老舍与北京文化》、《老舍的文化观》、《从人艺风格的形成看老舍的民族精神和地域特色》等论题。

讨论最热烈的是关于老舍与京味小说的问题，形成了两种明显不同的观点。概括说来，就是：一种意见认为当前北京文坛上已经形成了“京味小说流派”，标志是有老舍做为了一派的宗师；有一批师从老舍的中、青年作家；产生了一批有影响的京味小说作品。而另一派持反对意见，他们对“京味小说流派”是否存在提出质疑。认为即使有这样的流派，其发展前景也不乐观，因为京味是建立在老北京的生活习俗基础上的，现实生活中的北京越来越具有现代化大城市的特点，做为老北京遗风的“京味”逐渐减少。如果把老舍先生说成是“京味小说”的创始人或代表，就会贬低老舍作品深刻的历史意义和作用。这样的讨论，把老舍研究和当前北京作家的创作实践紧密联系在一起，使研究工作更具有了现实意义。

北京老舍研究会除了举办学术会议外，还组织了一些和国外学者的学术交流活动。如，曾请苏联汉学家介绍了苏联研究老舍的情况；还请伊藤敬一教授给本市几十位老舍研究者作过《老舍的文学世界》的学术报告，会长曹禺先生和中国老舍研究会会长吴祖光先生都出席了这次讲座。另外，今年二月，本会和老舍文艺基金会等单位共同举办了老舍先生诞辰92周年纪年会，参加会的有和老舍先生一起工作过，或者有过交往的同志、文艺界著名作家、艺术家、企业家共150多人。大家共同缅怀了老舍先生的高风亮节和他为中国文化事业所做的杰出贡献。

总之，上述活动的开展，加强了老舍研究者之间的联系和学术交流，团结、吸引了更多热爱老舍先生的朋友参加到研究老舍、弘扬老舍先生精神的队伍中来。

北京老舍研究会成立以来，北京地区的老舍研究工作有所进展，这主要表现在这样几个方面。

首先是研究视野扩大，开拓了一些新的研究课题，研究方法由单一走向多元。不仅重视社会学角度的研究，而且开展了从文化学角度、民俗学角度、心理学角度、美学角度以及比较文学角度等等多视角的研究。可以说，北京的老舍研究和全国的老舍研究同步，已经进入了一个新阶段。北京地区报刊上发表的老舍研究论文，就表现出了这样的特点。比如像《老舍创作的审美理想》、

《老舍的文化心态》、《老舍与北京民俗文化》、《八十年代京味小说与老舍作品的合点与差异》、《茅盾与老舍小说比较考察》等等一类论文就是这方面的成果。

研究工作深入发展的另一个重要方面是，资料发掘有了一些新进展。比如：

继1986年上海发现老舍早期作品《她的失败》和《海外新声》后，最近，北京档案局又发现了一批北京师范大学的资料，其中有老舍1917年到1918年间的照片和旧体诗、文言文习作，是迄今发现的老舍最早文字（1991年2月21日《人民日报》海外版已经介绍了有关情况，这里不再赘述）又如：

在北京出版的《中国现代文学丛刊》1990年第4期和91年第1期，连续发表了老舍四十年代末在美国讲学期间用英文创作的多幕剧《五虎断魂枪》的中文译本。英文本是北京第二外语学院客座教授罗斯·罗盖特女士在哥伦比亚大学图书馆发现的。现在在北京首次发表了这个剧本，这对研究老舍思想发展及创作，有很大的史料价值。

近年来，老舍的书简也有一些新的发现。还值得特别提到的是保存在人们记忆中的活材料的发掘。老舍生前亲朋好友和周围工作人员，还有和老舍有过交往的不少人撰写了一批回忆录，或讲述了他们所了解的老舍事迹。比如：

由老舍倡导成立的盲艺人讲习班的第一位班长刚振华；老舍参加抗美援朝慰问团时，负责接待的志愿军47军政委彭清云；周总理在重庆时的秘书张颖，以及冯玉祥将军的秘书于志恭等人，都提供了非常宝贵的第一手资料。

当然，在老舍研究资料的开掘和整理方面，我们做的还很不够，有待进一步努力。

老舍研究工作的发展和深入，还可以从老舍研究专著的撰写和出版方面得到反映，例如：

1986年由北京燕山出版社出版了本会副秘书长李志强（李犁耘）撰写的《老舍在北京的足迹》这是我国第一本系统记录老舍生活足迹的著作，1987年，该书的内容被拍成四集电视片，用影视的形式记录保存了珍贵的史料。

1986年北京出版的老舍著述还有舒乙撰著的《老舍》一书，日本东京作品社已出版译本，在

## 『老舍事典』を読んで

伊藤 敬一

座大概已经看到；

此后，1988年舒乙又出版了《老舍的关坎和爱好》，是一本很有特色的老舍传记；

1987年，受北京幽州书屋之托，他还主编了一本辑录名人学者纪念文学的书《老舍之死》。

1989年，我编著的《老舍年谱》由北京书目文献出版社出版，全书42万字，是目前国内出版的老舍年谱中，资料较详备的一种。

此外，孙钧政先生的老舍语言研究专著已经脱稿，将由北京出版社出版；由舒济、吴怀斌等人主编的《老舍辞典》（分文学和语言二册），正在加紧撰稿，参加编纂工作的都是老舍研究会会员。

北京社会科学院文学研究所有一项重点研究项目，叫做“北京文学地域特色研究”，其中老舍研究占有相当大的比重，做为这个科研项目的研究成果，有两本专著是关于老舍的，现在正在撰写之中。

另外，人民大学等高等院校的文学系，也在老舍研究方面投入了科研力量，准备写出老舍研究专著。

以上，就是我向各位介绍的北京老舍研究学术活动和研究工作的大致的情况。

☆ ☆ ☆

北京老舍研究会会长曹禺先生曾在本会首届理论年会致词说：老舍先生是伟大的爱国主义者，是一位非常了不起的人，全世界都很重视老舍先生的研究。关于老舍先生，是研究不尽的。当前，我们对这样一个“研究不尽”的老舍研究大学科，开展的还不够，还有待大幅度地提高，有许多工作需要大家齐心协力来做。

我们非常希望能和日本朋友们加强学术联系，互相切磋，以期在今后的老舍研究中取得更多的成就。

谢谢各位。

（北京市老舍研究会副秘书长）

\* \* \*

老舍の創作の原点が、彼の故郷である北京の庶民生活であることはよく知られている。むしろそれは現実の北京ではない。彼は新中国成立前の創作の全盛期をほとんど北京以外で過している。それは彼が生れて26才まで育ち、その間さまざまな努力、辛酸、傷心、屈辱と共にすみずみまで知りつくした「過去の北京」なのである。それは老舍が26才をさかいに故郷を離れることによって、心の中に「絵」のようにあざやかに思い出され、時と共によりこまやかに、よりはつきりと増幅され具象化されて常に創作の原点となった「幻の北京」に外ならない。

老舍はこのような心の中に蓄積された故郷の心象風景を心の中の「絵」とか「フィルム」にたとえて、私の知る限り三度も言及している。「私はどのように『老張の哲学』を書いたか」（1935年9月）と「私はどのように『離婚』を書いたか」（1935年12月）と「三年写作自述」（1941年）の三ヶ所である。比べて見ると創作生活の中で時と共にこの心の中の「絵」がより豊かに増幅されて行った過程を伺うことができる。

中山時子編、大修館書店発行（1988年12月刊）の『老舍事典』は、いわばこの老舍の脳裏に蓄えられた「絵」、つまり過去の北京のあらゆる姿を網羅し、これに詳細な解説を加えた一大百科全書なのである。それはこの本の執筆者たちが、丁度老舍と同じように、もはや直接見ることのかなわぬ過去の幻の北京のあらゆる姿を、老舍の作品と結びつけつつ、可能なかぎり追い求めた一大労作であることも云える。

私はこの『老舍事典』を読んで、ふと曾て、金匱に追われ二度とももどることのかなわぬ北宋の都、汴梁の姿をせめて書物の中で再現しようとした『東京夢華録』を連想した。これは正に『東京夢華録』の現代北京版である。中山時

了氏を中心とする「老舎を読む会」の人々をはじめ、日本と中国の多くの老舎研究者、そして老舎のご遺族の方々が執筆に協力しておられる。彼らの長年にわたる研究の最新の成果が、この本に集大成されている。そしてかつてのせまい政治主義的批評によって不当に低く評価され、その上「文革」の初期に無惨な迫害を受けて非業の最後を遂げた老舎に対する執筆者たちの執念に近い深い思いがこもった劃期的な仕事であると私は思う。

『老舎事典』は大きく前篇と後篇に分れていて、前篇はかつての北京の街の姿、さまざまな階層、職業の人々、庶民の衣食住、年中行事、冠婚葬祭、芸能、趣味娯楽、庶民の生計、医療、宗教、教育、学校、通信情報などあらゆる分野にわたり、老舎の作品との関係も含めて、詳細な復原と解説の努力がなされている。

後篇は最近の研究成果をふまえた老舎の略伝、年譜、住居や家族、宗教との関係、外国における翻訳や参考文献、そして作品の語句解釈などがまとめられている。巻末の跋で中山時子氏は、紙幅の関係でかなり大巾に圧縮し、せつかく作った多くのカードを割愛せざるをえなかったと述べておられるが、本来ならば二冊にして語彙なども全面的に収録できたらと惜しまれる。

とにかく老舎は奥深い作家である。ある面で人間の裏を見通したようなこわい作家でもある。膨大な作品に対する本格的な分析や再評価の仕事はまだ今後の研究に残されている。その意味でこの書は、老舎の愛好者、研究者にとって作品の背景を知ることのできる極めて有力な必携の書である。また昔の北京ないし中国の政治、経済、社会、文化など社会科学の諸分野の研究にも非常に役立つ好著である。

私は今までにない新しい形のこの『老舎事典』刊行の創舉に対し、深い敬意と高い評価を惜しまない。しかし将来、さらに多くの人によって研究が重ねられ、さらに詳細、豊富、正確を求めて充実されて行くべき性質の書ではないかと思っている。

\* \* \* \*

# 1991年春、北京

—祥子の道と老舎の原風景—

日下恒夫・倉橋幸彦

はじめに

1991年春の北京を訪ねる。旅の目的は三つ。老舎とその作品ゆかりの土地を歩く、中国の老舎関係者や研究者と語る、老舎ゆかりの食べ物と北京「老字号」の味を味わう。団名は「日本老舎愛好者研修訪中団」、団長は藤井栄三郎教授、副団長は中山時子教授と日下恒夫、秘書長は平松圭子教授、総勢四十二名の大所帯、3月26日から十日間にわたる「北京遊」である。

ところで、このごろ北京の巷では近々大地震が発生するという噂がまことしやかに囁かれていると聞く。あるいは「地震風」は89年夏以来の社会不安の一つの兆候であるかもしれないが、その分析は私達の手に乗る。ここは今回の旅行に関する二、三の報告と感想に過ぎない。

瑞雪

3月26日、中国民航機は予定通り(?)大幅に遅れ夜遅く首都空港に到着。折りしも北京は前夜からの大雪。同時期では二十年ぶりの降雪量。夜中というのに舒乙、於濱、舒濟御三方の出迎えを受け一同感激。続いてバスの窓から見る夜の雪景色を堪能、これにも一同感激する。瑞雪の歓迎が充実と満腹の旅の始まり。その夜は軽い夜食と聞いていたのに出てきたのはたっぷり重い食事。老舎の旅であると共に「吃北京」の旅であることを確認した北京第一夜であった。

老舎ゆかりの土地めぐり

(1)祥子の道:祥子が駱駝を引き連れ西山から城内に逃げ戻った道を歩く、これが旅の最大目的の一つ。それは「一閉眼,他就有了個地図:這里是磨石口—老天爺,這必須是磨石口!—他往東拐,過金頂山,礼王墳,就是八大処,從四平台往東奔杏子口,就到了南辛庄。為是有些遮隱,他頂好還順着山走,從北新庄,往北,過魏家村;往北,

過南河灘；再往北，到紅山頭、傑王府、靜宜園了！找到靜宜園，閉着眼他也可以摸到海甸去！」という『駱駝祥子』に見える記述に沿って歩くため我々の行動もまず郊外から始まった。

道を歩いたからといって作品理解が深まるものでもあるまいなどと言ってはいけない。これは老舎愛好の「老外」にとっていわば必須科目なのだ。もっとも祥子は自分の足で歩いたのに、我々はバスなのだからあまり大きなことは言えない。しかも折からの悪天候と寒さで、せっかく行った磨石口も坂を登ってまで見に行く気概もなかったのだから恥かしい。

この季節にしては奇跡的な「西山積雪」に眼福を楽しみながら、帰りは1964年秋に老舎が「下郷」していた時の居住地門頭村(39号)に立ち寄り、さらに臥仏寺では『趙子曰』に見える小さな亭で舒乙さんの相変わらずの美声の朗読に耳を傾け、昼は頤和園で御馳走を口にしたのち円明園へ。入場料を二カ所で徴収されて見学の後、祥子が城内を目前にして思わず熱涙をこぼした高亮橋(高梁橋)、小福子が売られた四等妓院のある白房子を横に見ながら城内へ。初日の活動だけでも旅の充実が知られるというもの。

(2)老舎の原風景:28日と29日はゆかりの土地巡り。久し振りに訪ねた小楊家胡同にある老舎生誕の家はすっかり様変わり。新街口附近の老店舗を見ながら、第13小学のあった南草廠や旧北師範旧址のある育教胡同、端王府夾道などを過ぎる。今回の旅のメインの一つは、1986年によく存在が確認された子供時代の老舎が通った私塾、正覚寺跡の見学。100年以上昔の建造物が今も北京市五金工具中等專業学校として健在なのに奇妙に感心。祖家街の三中は流石に重点中学、軍事訓練のポスターなどは見ず電腦教室を見るのが礼儀だが、むしろここでは伝統的な屋敷の造りが眼に嬉しい。

師範卒業ののち勤めた第17小学だった方家胡同小学や、郊北勸學員時代の公寓(1920~1921)旧址、缸瓦市基督教堂を訪ねたあと、北長街小学(北京教育会跡)の今も堂々たる雷神廟を見る。ここでは老舎に関する知識なしに通訳不可能、

この日はいつしか倉橋が担当するはめになった。

(3)終焉の地:太平湖は埋められており見ることができず残念だと言う人もいるが、私達にはそのほうがかえって気持ちが楽だ。だが孔廟は老舎愛好舎には老舎の死を思わせるので気が重い。なお悪天候のため墓地(明光村)には行かず、燕京八景の一、雨ならぬ雪の薊門煙樹を楽しむ。

#### 語る—三つの座談会

旅の楽しみは友人や懐かしい人と会うこと、さらなる楽しみは語ること。30日午前は団にとって有意義であるべき北京老舎研究会との座談会。今ではもはや「あの」といっても若い人には分らないかも知れないあの楊沫さんはじめ中国側の出席者は以下の通り。肩書きは一部のみ。

楊沫(作家、北京市文聯主席)・趙金九(作家、北京市文聯副秘書長、北京市作家協會副主席)・蘇叔陽(作家)・趙大年(作家)・劉錫慶(北京師範大学教授)・王松声(北京市老舎研究会副會長)・宋汎(作家北京市文聯常務主席)・甘海嵐(北京社会科学院副研究員)・葛翠琳(作家)。そのほか舒濟さんも出席された。

ただ会場が歴史博物館とくればどうしても挨拶が中心。甘海嵐さんの報告もすでに我々の心得ていることが中心だったが、いわば公的な場所であればやむを得ないかもしれない。かつて友好賓館で語りあったことを懐かしく思いだす。それにしても、自分自身の著書を手に入れるのに北京中の本屋をかけ巡らなければならないという話に、改めて中国の「買書難」を実感する。

この集りでは中国側の全員のお話を聞けなかったのが心残りであった。ユーモア溢れる趙大年さんの話は全員の記憶に残っていようが、雄弁家としても名高く、当代「京味」小説家の代表でもある蘇叔陽さんの話を聞けなかったのは残念の極み。また発言しかなかったのに沈黙を余儀なくさせられた人がいたのも遺憾であったが、散会後の晋陽飯莊(閔微草堂旧址)の各テーブルで話が盛り上がったのは大きな慰めとなった。

29日の夕方は首都劇場で北京人芸の老導演や老演員、於是之、鄭榕、黃宗温、李翔さんらを囲んでの交歓会。だが俳優に対し老舎小説に関する

質問するのは御門違いではないだろうか。せっかくなら演劇の話に終始したいもの。話のうち各演員の手になる書画の購入を勧められた。天下の北京人芸でさえこうなのだから、各地の舞台演劇団の経営難は想像にあまりある。

最後の座談会は4月3日の午前、対外友好協会内にて在北京の中国老舎研究会メンバーと開催。司会は舒乙さん。中国側出席者は、孫鈞政、趙園、関紀新、彌松頤、王行之、王富仁、李翔、曾廣燦、朝戈金および舒乙さん。いずれもいわば老朋友なので肩書きも不要であろう。いずれもそれぞれ独自の研究対象をもち、成果も有すると同時に老舎研究でも先端に位置する方がほとんどであり、しかもこの座談会は参加者も少人数で、そのうえ通訳抜きで語り合える実り豊かな時間を過ごせるはずだった。

中国側では舒乙さんから最近北京档案馆で発見された老舎の早い時期の文章の紹介ははじめ現在進行中の各位の研究状況の紹介も惜しげもなく披露されるなど、有意義な交流にすべく心配りが感じられた。だが私達の方は第1回目の座談会の折もそうであったように打合せと用意が不足していたことは自戒すべきである。問題は論議が噛み合わなかったなどということではあるまい。こんな機会は誰にとってもそう何度ももてることではないだけに後悔が残る。

#### 見る、聞く

今回見たり聞いたりしたものは多いが、見るといえば北京映画製作所。ここでは映画用セットをそのまま楽しむことができる。ことに民国期の通りのセットはいつ見ても何かしら懐かしい。また使用済み(?)の小道具置場に「棺材」が場違いな感じで放置してあるのも面白い。そこでの庄巻は初代祥子を演じた李翔さんの人力車を引く若々しい勇姿だったかもしれない。ただ『紅樓夢』撮影用に作った建物のセットは立派とはいえ実際には人が住めるようにはなっていない。今でも時代ものの撮影には使うそうではあるが、できれば高級ホテルかレストランに改造して見学ツアーでも呼べばせめて撮影所の赤字を埋められるのに、などと余計なことを考え

るのは私達が大阪人だからかもしれない。

撮影所のとあと万寿寺横の中国現代文学館も訪問。徐々に整備が進められてはいるが、完璧な利用に供するまでには時間が掛かりそうだ。

聞くといえば、老舎茶館で「曲芸」を見、京音大鼓なるものをはじめて聞く。新中国になって大道芸人が芸術家になるのに老舎の力も大いにあづかった。それ自体きつと悪いことではないのだろうが、娯楽の多い時代にこの芸を伝えてゆくことは前途多難なことかもしれない。

4月1日には団としては遙か南郊の蘆溝橋へ、私たち野次馬組数人は念願の天安門城楼に上る。登楼料(?)は 外国人特別価格30元。もっとも中国人は誰でもが上れるわけではなく料金10元の他に単位の紹介書が必要とのこと。上から見ると行き交う群衆が一瞬蟻に見えたような気がした。領導人たちの目にもそう映っていたのだろうか。ところで上では北京市公安局の若い人が城楼の一番外側に5m間隔位に観客のほうを向いて立っているのはご苦労なことだ。ことに寒いな北側の担当者はまだ融けていない雪の横にいたのだからなお大変などと、せっかくの天安門の上で下らぬことに関心したものである。

ついでに見たものもう一つ。折りしも映画「周恩来」(だったはず)の撮影中で、舞台背景として使われている国子監前の通りを見た。両側は壁も街路樹もさまざまな「大字報」でおおわれており「文化大革命」の再現の感があった。撮影用とは分っていないが、通り過ぎるとき何かしら緊張を感じたのは私達だけではないはず。

#### 会う、食べる

この旅はグルメの旅でもある。到着の夜から出発の前夜まで、全ての食は文字通り豊富の一言。満漢全席、四川菜、山東菜、潮州菜、広東菜等々、ないものはない。なかでも昼は御膳の宮廷料理で皇帝気分、夜は名前のみ知っておりながら見たこともない北京小吃で老百姓気分を味わえたのだから贅沢の極みとでも言おうか。

とはいえ、いかなる御馳走も一人で食べたのでは味も半減する。それなら4月2日は美味しさも格別であったと言うべきである。

その日は午前中に老舎夫人を訪問、団員は倒書した「福」字の色紙をいただく。午後は八宝山公墓に老舎「骨灰」を参拝、あらためて老舎父子の「骨灰」の因縁に思いをはせた。夕刻、豊富胡同にある「老舎故居」を何年かぶりで訪問。まず南屋で小型「老舎展覧会」を見学ののち、丹柿院子にて、舒済さん一家総出の手作りの炸醬面、李翔さん持参の麻豆腐、折から帰省中の王研さんが朝から「排隊」して買ってこられた心里美などに舌鼓を打ち、二鍋頭に酔う。人がおり、話があり、素朴な美食を楽しんだ一夜であった。

#### 帰国のあとで

旅には別れがある。我々の旅も4月3日で終わり、4日の早朝京倫飯店を出発し帰途についた。

振り返ると、充実と満足の旅ではあったが、一方では心残りや反省の残る旅でもあった。この旅が1991年老舎の旅であるのに、少なくともおおよの場所では一度もあの王氏論文を正面から取り上げることがなかったのもその一つ。

また、全行程を通じ人と話してもっとも多く耳にした言葉は「お金が足りない」である。現代文学館でも老舎故居でも北京人芸でも座談会でも友との語り合いの中でも、これまでに耳にし、想像していた以上に資金難が深刻だということがひしひしと伝わってきた。と同時に、中国が今はいわば沈黙と停滞の時期であるにもかかわらず、それぞれの研究者が確実に研究を継続していることも私達には伝わってきた。改めて中国の同行に敬意を表したい。

別れ際に舒乙さんが小声で言われた要望に応じて、また北京を訪問する機会があればと思う。

最後に、今回も対外友協の方々はじめ多くの方々のお世話になったが、ほとんど全行程をお付き合いしていただき、いつもながらの博識で我々を啓蒙されたうえ、観光案内までされた舒乙さんには衷心から感謝したい。以上

[参考] 団の日程は次の通り。

3月26日：到着、京倫飯店／3月27日：前一(祥子の道)磨石口、杏石口、南辛庄、北新庄、魏家村、門頭村、南河灘、紅山頭、傑王府、臥仏寺；昼一頤

和園；後一円明園、高亮橋、白房子；夜一全聚徳で歓迎宴／3月28日：前一小楊家胡同、老店舗、正覚寺、新開胡同、南草廠、育教胡同、北師範旧址、三中、竜須溝；昼一御膳にて満漢全席；後一太平湖、薊門煙樹、明光村(墓地)、旧北郊勸学事務所；夜一貴陽飯店で北京小吃、京劇鑑賞／3月29日：前一雍和宮、孔廟、方家胡同小学；昼一四川飯店；後一缸瓦市基督教堂、北長街小学、北京人民芸術院；夜一紅樓飯莊／3月30日：前一北京老舎研究会との座談会；昼一晋陽飯莊；後一北京電影製片廠、中国現代文学館；夜一首都賓館、老舎茶館で曲芸鑑賞／3月31日：前一故宫；昼一貴陽飯莊(窮人吃)、後一郭沫若故居、恭王府；夜一大觀園紅樓宴／4月1日：前一前門、天橋、紅橋、天壇；昼一孔膳堂、後一陶然亭、瀝溝橋；夜一加州焼肉店、話劇《閩漢卿》鑑賞／4月2日：前一老舎夫人訪問；後一八宝山公墓に老舎「骨灰」参拝；夜一「老舎故居」訪問、丹柿院子で舒済さん一家総出の手作り炸醬面／4月3日：前一対外友好協会内で在北京の中国老舎研究会メンバーとの座談会。昼一王府飯店；後一自由／4月4日：帰国

[付記] 我々の団に取材した文章で目撃しえたものは以下の通り。ご要望のむきは事務局に連絡を。なお<記事1>は曾広燦さんが団の訪中以前に書いた文章(《學術消息》91.3?)の要約。曾氏の文章をお持ちの方がおられましたら事務局あて御一報ください。

- 1、記事<日本老舎研修団第五次来華>(文学報 第525期、91.4.18)
  - 2、馬廷淮<北京を訪れた日本の老舎研修訪中団>(北京週報 vol.18、91.5.7)
  - 3、曹復<沿着老舎的足迹—日本老舎愛好者訪華団在北京>(文学報 第529期、91.5.16)
  - 4、曹復<老舎ゆかりの地を訪ねて—日本の研究会北京へ>(人民中国 7月号、91.7.5)
- 団員個人について触れたものに以下の二篇。
- 5、曹復<依依“故土”情—記馬場女士与蘇叔陽的友誼>(文学報 第526期 91.4.25)
  - 6、趙大年<日下恒夫教授>(北京晚報 91.5.10)

☆ ☆ ☆ ☆

事務局だより

◆この号から事務局の移動にともない会報編集も関西に移りました。よろしくお願ひします。

◆1990年度第7回の老舎研究会総会および研究発表会は6月23日(土)中京大学において開催されました。休み期間中でなかったためか参加者がいつもより少なかったのが残念でした。当日の講演と発表・題目などは以下の通りです。

[研究発表]

1. 岡本俊裕(大阪教育大学):『茶館』の言葉について
2. 倉橋幸彦(大阪産業大学):「満族作家」老舎の誕生をめぐる
3. 日下恒夫(関西大学):『四世同堂』は本当によみがえったか
4. 今富正巳(東洋大学):中山高志先生邦訳『駱駝祥子』の経過について

[講演会]

5. 李輝(中国老舎研究会):談『駱駝祥子』

◆当日の総会において委員の交替および事務局の移動が承認されました。新しい委員と事務局は以下の通りです。

代表委員:藤井栄三郎

常任委員:(東京)杉本達夫、平松圭子  
(名古屋)柴垣芳太郎、伊藤敬一  
(関西)藤井栄三郎、稲葉昭二  
陳兼臣、日下恒夫

事務局:関西大学 中国文学(日下)研究室

◆長いあいだ代表委員を務められた柴垣芳太郎先生には心から感謝いたします。今後ともよろしくご指教くださいますようお願いいたします。

◆中山高志先生から『駱駝祥子』を研究会にご寄付いただきました。会員には1冊千円で頒布いたします。

◆今年(1991)年度の総会と研究発表会は、会場の都合により金曜日に開催することになりました。当日のプログラムは以下の要領です。

日時:1991年7月26日(金曜日)

場所:関西大学百周年記念会館

人と話:

孟丹 <孟広来先生の老舎研究>

松村茂樹<老舎の文人観および文人趣味観について>

中野耕市<老舎の音感—擬声詞の形態論的特徴>

尾崎 賢<老舎のことば遣い>

◆1991年3月26日から4月4まで、中山時子先生のご尽力で「老舎愛好者研修団」が結成され、藤井栄三郎団長以下計42名が北京を訪問。折からの大雪をおして老舎ゆかりの地を見学、二度の座談会に参加。本号掲載の甘海嵐氏(北京社会科学院文学研究所)の原稿は第一回目に開催された「北京市老舎研究会」主催の座談会における発言原稿をそのまま掲載したものです。団の旅行記は日下・倉橋の本号に掲載した「1991年春、北京」と旅行行程表をご参照ください。

◆今回の旅行を通じて、何も老舎研究のみに限りませんが、今の中国における学術研究とその発表の困難さを改めて実感。ことに経済面での困難さについては、これまでもさまざまな方面から耳にしてきましたが、実情はわれわれの予想を遙かに越えているように思えました。

◆事務局の怠慢により会報の発行が遅れたことをお詫びします。また諸般の事情により今回はワープロ原稿を版下にしました。これまでより見にくいかも知れませんが、時間と経費の節約を考えてのこととご了承ください。

◆本会報も第11号、そろそろ会の在り方や会報に関しても考え直すべき時にきているのではないのでしょうか。少なくとも会報の継続的な発行のためには会員の方々の寄稿が第一。次号は遅くとも年内には出したいものです。各地の読書会や研究会の紹介でも結構ですし、老舎ゆかりの論文やエッセイなど、会員各位の積極的な投稿をお待ちしております。(夏)

老舎研究会会報第11号(1991年7月15日)

〒564 吹田市山手町3丁目3-35

関西大学 中国文学(日下)研究室内

老舎研究会事務局

☎(06)388-1121(大学代表)